

※印欄記入不要

2010年12月10日

※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号	学籍番号	86080001	研究指導 教 員	井上史雄 ㊦
	氏 名	江 源 ㊦		

## 学 位 論 文 内 容 要 旨

応用言語学 研究科  
博士後期 課 程

学位論文題目

言語景観の形成過程に関する社会言語学的研究

氏 名： 江 源

研究指導教員：井上 史雄

学位論文要旨

キーワード：言語景観、形成過程、社会言語学的研究、言語的属性、非言語的属性

言語景観は言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化したものとして捉えられる。グローバリゼーションが進むとともに、言語景観はこのような時代の変化を敏感に反映し、グローバリゼーションを測る指標になりつつある。すなわち、言語は社会活動の産物であり、言語使用状況は社会状況の縮図でもある。本研究は、景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その社会的形成過程を解明しようとするものである。本論文は、1) はじめに、2) 研究概要、3) 横断的考察、4) 日本における言語景観、5) 中国における言語景観、6) おわりにとの 6 章で構成されている。以下、各章の内容に沿って概要を述べる。

第1章では、言語景観の定義と本研究の背景、そして言語景観に関する先行研究の分析と現状の問題点について述べた。

理論的出発点によって、日本における先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分類し、紹介した。同時に、海外でもさまざまな視点や方法による調査研究がなされてきた。これらの先行研究は、研究目的によって、データの採集方法がそれぞれ異なる点が多いため、直接比較するのを控えたほうがよいと思うが、1つの地域あるいは複数の地域を1つの全体としてとらえる研究がほとんどであり、複数の地域を比較する研究はまだ十分でないようである。言語景観の形成に影響する要因を考えた時、社会経済的属性の役割は重要である。そしてその実態を把握する上で、言語景観における言語的属性と非言語的属性の相関関係の研究は重要な意味を持つ。これまでの先行研究では、非言語的属性に着目した研究は少なく、また複数国の言語景観を比較して、その共通性に着目したものはほとんどない。

※印欄記入不要

2010年12月10日

※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号	学籍番号	86080001	研究指導 教 員	井上史雄 ㊦
	氏 名	江 源 ㊦		

具体的には、まず、先行研究は方法論がそれぞれ異なるため、他人による研究と客観的に比較することが困難である。先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究の果たした意義は大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要があることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点を導入すべきだと考える。

次に、言語景観における言語あるいは言語使用そのもの、いわゆる言語内的な側面に焦点を当てたものが多いが、言語景観に含まれる社会的側面、いわゆる言語外的な側面にも関心を払うべきである。

また、特殊な地域における特殊な個々の看板に着眼したものが多く、世界範囲で言語景観使用傾向の共通性、言語景観の成り立ち方、すなわち形成の法則性を探るものは見当たらない。

以上のことから、本稿では、筆者の調査によるデータのほかに、先行研究および歴史的写真集、また他の研究者に提供されたデータも活用した。多言語・多文字指数、文字種の組み合わせ方、使用言語種（母国語、英語、その他）の比率を算出し、可能な範囲で筆者のデータと比較することによって、言語景観研究の方法論の確立を図りながら、言語景観研究を理論的に位置づけていくことにする。

第2章では本研究の研究目的、研究対象、研究の具体的調査方法について述べた。

言語景観の形成過程を含めて、言語景観の全容を、たとえ概説的にでもとらえたとすると、それは、単に言語の問題だけにとどまらない。社会や文化の問題から、さらに政治・経済の問題などまでも関連してくる。言語内の側面だけでは、十分なものとはいえない。したがって、本研究の一番の目的は、社会言語学的観点から景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その形成過程を解明することである。そして、もう1つの狙いは言語景観に見られる言語使用を考察することによって、言語景観の定義を新たに定め、実証的に国際化・英語化・多言語化等の社会的変化の進行状況を測定することである。

調査は、路上観察や予備調査を重ね、以下の4都市の16地域における言語景観について行った。2007年6月から12月にかけて東京都23区内にある銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町で、2009年2月には上海市にある南京路、豫園、新天地で、3月には大阪市にある道頓堀、心斎橋、日本橋電気街で、2010年6月には香港にある旺角、油麻地、尖沙咀、銅羅灣、蘭桂坊である。考察項目は言語景観を2つの非言語的属性（地域、業種）、3つの言語的属性（言語種、文字種、表記法）という5つの項目に設定した。また、実地調査のほかに、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施している。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

※印欄記入不要

2010年12月10日

※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号	学籍番号	86080001	研究指導 教 員	井上史雄 ㊦
	氏 名	江 源 ㊦		

研究方法は、言語景観に関する研究方法を理論的分析視点と分析技法との2つの側面から論じた。本研究では、単純集計の結果と照らし合わせながら、指数、三角グラフ、コレスポネンス分析によって得られたグラフをマクロ的視点で総合的に考察していく。

第3章では、先行研究の問題点を踏まえて、国別、地域別で細かく考察する前に、筆者の調査によるすべての地域及び関連資料によるデータを分析し、言語景観における業種と言語使用の相関関係、共通性、通時的変化等を考察する。

まず、言語景観における各考察項目について単純集計をし、現状を把握する。

次に、各地域の言語景観の多言語指数・多文字指数を散布図で表し、考察を行った。多言語化と多文字化の進み具合で、各地域は3つのグループに分けられ、それぞれ多言語化・多文字化到達レベルの低、中、高を示す。香港の各地域は多言語・多文字指数の点数がともに高いことが目立つ。これは長年イギリスの植民地であったことから、英語の使用が浸透した結果だと考えられる。

また、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の3種に分類し、三角グラフの作成を試みる。本論では、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の3種に分類した。3種類の言語の相関関係を捉えるために、三角グラフ図を作成してみた。以下のことが読み取れる。まず、母国語使用は、原点である。ほとんどの場合、中国では中国語を使用し、日本では日本語を使用する。次に、英語使用増加は、国際化の象徴である。また、多様化した国際化の風潮はその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の言語の使用を盛んにしている。つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の取り入れによる共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。歴史事情と照合し近代から現代までの言語景観における言語使用の変遷が見られ、将来の変化の進行方向も推測できる。

最後に、各地域のデータを同時に多変量解析にかけ、考察した結果は言語景観の多言語使用パターンは多用される言語の特徴を基準に、欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）の3つに分類できることが考えられる。

具体的には、言語使用の視点から総合的に考察すると、調査地域をヨーロッパ諸言語と英語を多用するグループ、母国語の日本語・中国語また英語を満遍なく使用するグループ、母国語の日本語あるいは中国語を中心に使用するグループの3つに分類できる。この3つのグループは言語的特徴により、それぞれ言語景観の欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）と名付けてみた。この分類から、言語景観の言語使用においては、国が異なるものの、共通している使用パターンがあると推察される。そして、社会が言語に影響するという観点から考えると、各グループの特徴は、言語的属性項目の使用状

※印欄記入不要

2010年12月10日

※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号	学籍番号	86080001	研究指導 教 員	井上史雄 ㊦
	氏 名	江 源 ㊦		

況は社会的属性項目の共同作用でもたらした結果であり、逆に言えば、社会的属性項目はいかに言語景観の形成に影響するかが言語的属性項目の使用状況により、解明される。まず、欧米志向型のグループでは、欧米諸語またローマ字が多用されており、左横書き表記もそれに応じて多く用いられていることがわかる。業種のファッション関係、医療、健康、美容関係は欧米から多くのものを摂取しているため、英語及びヨーロッパ諸言語使用の多いことがこの結果に表れている。次に、折衷志向型のグループでは、バラエティーに富んだ業種に対応する多言語と多文字種の併用が多数存在している。そして、本国志向型のグループでは、漢字あるいは繁体字（中国語）ならびに、縦書き表記と右横書き表記が主であることが特徴的である。

第4、5章では、第3章の考察結果を踏まえて、国・地域でさらに細かく分析、考察した。まず、地域別で各言語的属性の使用率を見た。そして、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、通時的変化の考察を試みた。再び各地域のデータを多変量解析にかけ、考察した結果は日本（東京と大阪）の言語景観における言語使用パターンは使用言語の種類を基準に、本国志向型、欧米志向型、アジア志向型の3つに分類し、中国（上海と香港）における言語景観の言語使用パターンは本国志向型と欧米志向型の2つに分類した。

第6章では、本研究の結びとして、言語景観研究の理論的位置づけを述べたのち、本研究の研究結果をまとめ、今後の課題を提示した。

本章では、第3、4、5章の考察の結果を踏まえて、言語景観研究の定義、方法論、言語景観の言語使用に見られる言語変化の現象、より普遍的な言語景観研究の理論的枠組みについて、改めて総括し、言語景観研究を理論的に位置づける。第1章でも指摘したように、在来の定義には様々な問題点がある。社会的属性項目（地域、業種）が言語景観にける言語的属性項目（言語種、文字種、表記法）の使用に及ぼす影響の法則性がわかったことから、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものだと新たに定義できる。

言語変化の現象には収斂と分散の2つの流れがある。言語景観の言語使用においては、どのような言語変化がみられるかを再び多変量解析法のコレスポンデンス分析で得られたグラフを内省して考えてみた。日本と中国はそれぞれ母国語としての日本語あるいは中国語の使用から出発し、英語の国際化を背景に、一旦、英語の使用が増加する。この変化は英語の国際化に伴う現象と解釈できる。次に、英語を使用するだけでは、意思伝達あるいは雰囲気作りの役割がはたしきれないことがあるため、英語からそれぞれヨーロッパ諸言語、アジア諸言語に向かう2本の矢印が示してあるように、英語のはたしきれない役割をヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語に分担してもらっていることが考えられる。例え

※印欄記入不要

2010年12月10日

※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号	学籍番号	86080001	研究指導 教 員	井上史雄 ㊦
	氏 名	江 源 ㊦		

ば、フランス製、イタリア製のブランド品を扱うファッション関係の店舗はやはり英語よりもフランス語、イタリア語をそのまま使用することが多い。同様に、韓国料理の飲食店は、英語でなく、ハングルを店名看板に起用するだろう。この現象は英語の国際化以外に、多様化した国際化を意味する。

以上のような内的考察の結果をみても、言語景観における使用言語種の取捨において、母国語使用から英語使用への収斂、そして英語使用からヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語使用へ分散という言語変化の現象が見られる。この現象についての解釈は三角グラフによる推測と一致する。

最後に、今後の課題として、本研究の成果を生かした言語景観研究の理論的枠組みの構築を完成させたい。また、言語景観の資料をさらに充実させ、本研究の資料とあわせることによって、世界の言語景観を対象としたコレスポネンス分析を行い、地域性、業種による経済性以外に、言語景観の形成に影響をもたらす要因を抽出し、より広い視野に立って、言語景観研究の国際比較を行っていく必要性を感じた。